

ヒヤリ・ハットを 繰り返さない建設現場へ

知見を活かす情報活用術

本書の内容

建設現場では、ヒヤリ・ハットや事故、トラブル、人的ミス、熱中症をはじめとする現場での体調不良など、日々大小さまざまなインシデントが発生しています。これらは「起きてしまった出来事」であると同時に、「次に活かすべき教訓」でもあります。

しかし現実には、多くの現場でその情報が記録されたまま共有されず、活用されていないのが実情です。

「似たことが以前にもあったのにこの現場では誰も知らなかった」「報告書はあるが読まれていない」そんな声があとを絶ちません。

その背景には、インシデント情報を「組織で活かすための仕組み」が整っていないという課題があります。

本書では、現場の知見を循環させるための考え方と、その実現のために何をすべきかを解説していきます。

本書でわかること

1. 建設現場で発生するインシデント
2. なぜ情報が活かされないのか
3. 情報が集まる仕組みづくり
4. Qastで実現する「話すだけでナレッジ共有ができる仕組み」

建設現場で 発生するインシデント

01

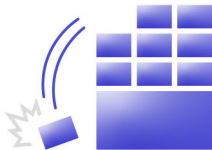
インシデントが埋もれていく、気づきが共有されない
そんな現場の実態を、3つの視点から紐解きます。

建設現場で発生するインシデントとは？

建設現場では、常に多種多様なインシデントが発生します。たとえば以下のような事例が挙げられます。

建設現場で発生するインシデントの例

ヒヤリ・ハット



事故には至らなかったが
危険を感じた

事故



ケガや破損など
実際に被害が出た

トラブル



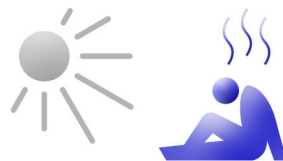
設備不具合等
業務進行に支障が出た

人的ミス



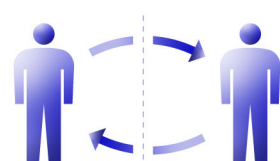
確認漏れ・誤操作などに
よる人為的エラー

体調不良（熱中症など）



特に夏場に多く
発生する健康リスク

連携ミス



意思疎通不足による
伝達ミスや手順の齟齬

インシデントの記録は、現場の安全性を守るうえで欠かせない取り組みです。しかし、記録が目的となってしまっは意味がありません。記録の本質的な目的は、「再発を防ぐこと」「同じミスを繰り返さないこと」にあります。

建設業界では、現場ごとに環境や作業内容も異なります。だからこそ、「その場にいた人だけが知っている知見」を、いかに組織全体に残し、活かせるかが鍵となります。インシデントを「記録して終わり」にせず、「次に活かす」ためには、情報を蓄積・共有・活用するためのしくみが不可欠です。

なぜ情報が 活かされないのか

02

情報はあるのに活かせない、届かない声が積み重なる
そんな現場の壁を整理していきます。

情報が活用されない理由

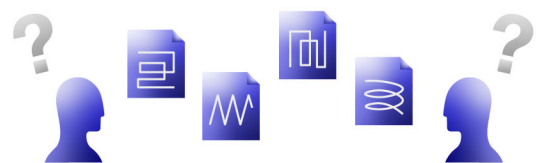
現場で発生したヒヤリ・ハットや事故の情報は、本来であれば次の現場の安全向上に活かされる貴重なナレッジです。しかし実際には、十分に活用されていないケースが多く見られます。

その背景にはいくつかの要因があります。たとえば、報告が紙・Excel・PDF など複数の形式で管理されており、検索しづらいこと。また、記録の書き方が人によって異なり、内容が整理されていないため必要な情報を読み取りにくいことも挙げられます。加えて、ナレッジを持つ本人が、それを価値ある情報だと自覚していない・共有された情報を活かすための使う場所が整備されていないといった構造的な問題や、報告作業が現場作業員にとって負担となり、そもそも共有が進まないという課題も見られます。

よくある情報活用の課題



報告が紙・Excel・PDFなどで
バラバラに管理されており、検索しづらい



表現や分類が属人化していて
読みづらい



ナレッジを持っている本人が
それをナレッジだと自覚していない



ナレッジを「使う場所」が
整備されていない

まとめ

課題を解消し、ナレッジを効果的に活用するための仕組みづくりが求められています。

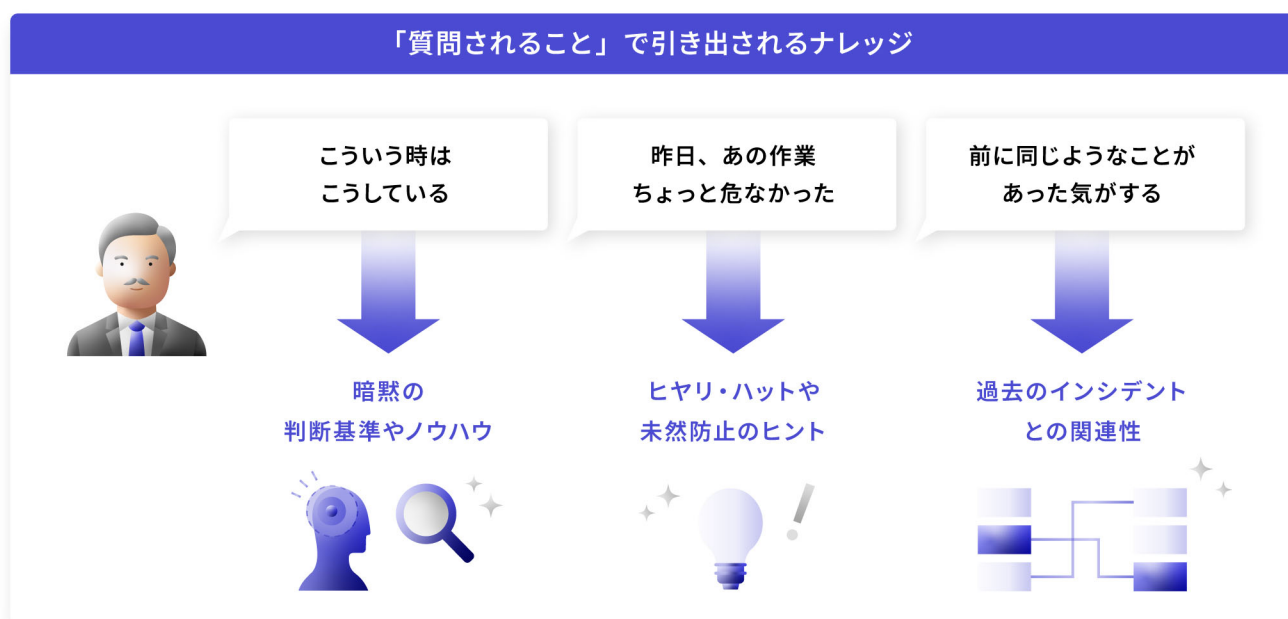
情報が集まる 仕組みづくり

03

個人の経験を、現場全体のナレッジに変えるには
共有されないナレッジを、組織の資産に変えるための仕組みを考えます。

「質問されること」でナレッジが引き出される

現場で得たナレッジが記録されない要因のひとつに、本人がそれを価値ある情報と認識していないことが挙げられます。このような場合、「どのような判断だったのか」「どこに工夫があったのか」といった問いかけにより、気づきを引き出すことが有効です。



話している本人にとってはごく当たり前のことであっても、他の人にとっては業務のヒントやリスク回避の知恵になることがあります。にもかかわらず、それらが記録として残らないのは、「これは共有するほどのことではない」という意識が働いているからかもしれません。

誰かに聞かれれば自然と話せることでも、自分から進んで書き残すというのは意外とハードルが高いものです。特に現場では、時間の余裕がないなかで報告業務に手間をかけることは現実的ではありません。

ポイント ナレッジを蓄積するには「記録のハードルを下げる」だけでなく「引き出すこと」が鍵

Qastで実現 インタビューを受けるだけで ナレッジ共有ができる仕組み

前章で紹介した「音声による共有+AIによる形式知化」の機能を提供しているのが、AIナレッジプラットフォーム「Qast(キャスト)」です。Qastでは、「自然言語で話すだけで共有できるナレッジになる」機能を提供しています。

話すだけでナレッジになる！AIナレッジインタビュー

対話をしながらナレッジを引き出す



〇〇は、どのような手順で行っていますか？

〇〇を行うにはまずAというところからBを引き出し・・・

AとBは、それぞれどこにありますか？

Aは〇〇にあって、Bは〇〇にあります。どちらも・・・



有識者



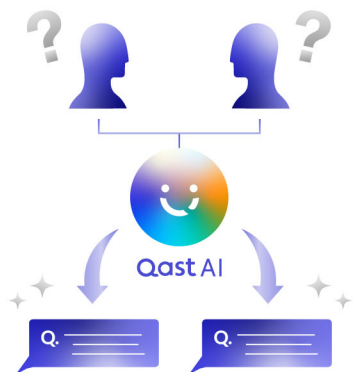
「音声のやりとり」を
構造化されたナレッジに変換

AIが自然な問いかけを行い、「なぜそうなった？」「どんな対策をとった？」など深掘りすることで、発言者の思考が整理され、自分でも気づけなかったナレッジが言語化されていきます。ふだんPCを使った業務をしていない現場のベテランや、テキスト化が得意でない有識者の暗黙知を形式知化するのに役立ちます。

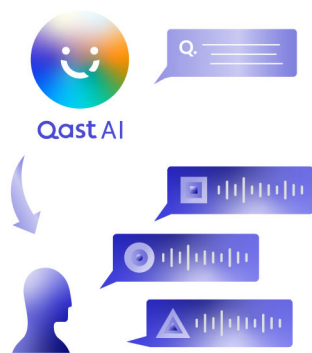
AIナレッジインタビューのメリット

AIインタビュー機能を活用することで、次のようなメリットが期待できます。

「聞きたいこと」を設定するだけで
AIが良質な質問を生成



AIの質問に音声で回答することで
暗黙知を形式知化



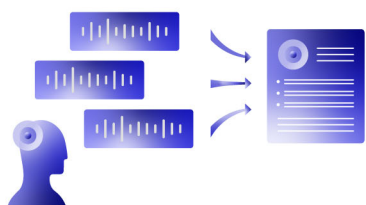
AIが構造化したテキストを生成し
ナレッジ投稿



登録されたナレッジはすぐに検索対象となり、現場の知見が即活用可能に

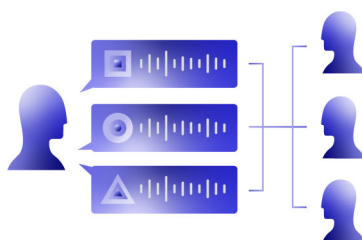
活用シーン

若手の「知りたい」を起点に
有識者の音声ナレッジを資料に変換



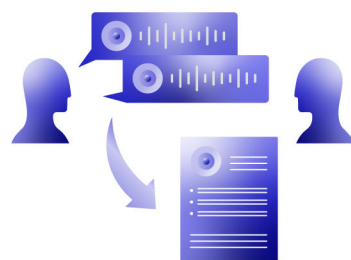
「トラブル対応のコツは？」などの
質問を設定し、ベテランの話を自
動で教材化。

音声でのインタビューで
現場ナレッジを本部も把握



「最近のヒヤリ・工夫点は？」と
いった問いかけで、現場の知見を
収集・蓄積。

口頭での引継ぎを記録し
マニュアル化ナレッジとして活用



「この作業の注意点は？」など、
日々のやりとりを自動で記録・マ
ニュアル化。

ポイント

「記録に時間がかかる・書きづらい・読まれない」課題を解決

知の共有を支える実践ツール

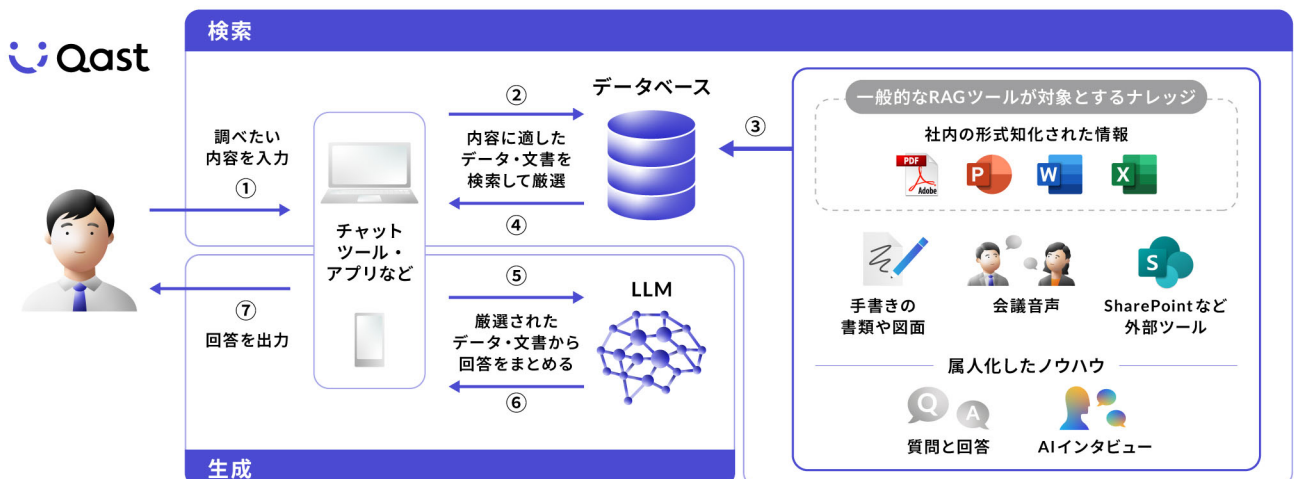
暗黙知の形式知化と、その活用・定着を実現するには、ナレッジマネジメントを支える「仕組み」や「ツール」の存在が不可欠です。Qastはナレッジマネジメントに特化したツールとして、組織の知を循環させるための多彩な機能を搭載しています。

Qast でできること

- 1 散らばった社内の情報を生成AIで瞬時に蓄積**
 あらゆるファイルをワンアクションで蓄積し、生成AIが業務に役立つナレッジに変換します。
- 2 知りたい情報を生成AIが数秒で回答**
 自然言語で質問すると、蓄積された情報からRAGを活用して生成AIが自動回答します。
- 3 属人化したノウハウを組織のナレッジに**
 社内Q&Aで有識者からノウハウを回答として引き出すことで、暗黙知を形式知化できます。
- 4 質問の重複をAIで排除し回答者の工数を削減**
 Q&Aでの質問内容をAIがリアルタイムに読み取り、類似の投稿をサジェストします。
- 5 部署・拠点横断でナレッジをひろく共有**
 心理的安全性を担保しながら部署横断での情報共有を可能にし、組織全体の生産性を高めます。
- 6 社内の誰が何に詳しいかを可視化**
 社内メンバーのスキルがわかるユーザータグで、部門や拠点をまたいで有識者を探せます。

Qast に搭載された生成AIが蓄積されたナレッジから知りたいことを自動回答

自然言語で行われた質問に対し、Qastは社内情報を自動で検索・要約し、数秒で正確な回答を提示します。





— AIナレッジプラットフォーム —

ナレッジの資産化が、 企業の未来を つくり出す

社内に埋もれている人の経験や知識を引き出し
企業のナレッジマネジメントを成功に導く
クラウドサービスです。



暗黙知の形式知化から検索・活用まで 生成AI×人で創るナレッジマネジメントの最適解

ナレッジは、整え、活かしてこそ資産になる
Qastは、RAGを通じて知の生産性を高め、組織全体の力となります



サービス紹介ページへ

